

p69 「一問一答」

1. ショック(アナフィラキシー)は、生体異物に対する即時型のアレルギーの一種である。
2. 皮膚粘膜眼症候群はライエル症候群とも呼ばれ、発症機序の詳細や原因となる医薬品名等も明らかとなっている。
3. 医薬品によって生じる肝機能障害はすべて、有効成分やその代謝物の肝毒性が原因で起きる中毒性のものである。
4. 偽アルドステロン症では、体内にカリウムと水分が貯留し、ナトリウムの排泄が促進されるものである。
5. 無菌性髄膜炎は、全身性エリテマトーデス、混合性結合組織病、関節リウマチ等の基礎疾患のある人での発症リスクが高い。
6. イレウス様症状は、小児や高齢者のほか、普段から便秘傾向のある人に発症のリスクが高い。
7. 喘息は、内服薬のほか、坐薬や外用薬でも誘発されることがある。
8. 間質性肺炎の症状は、かぜや気管支炎の症状との区別が難しいこともある。
9. 接触皮膚炎は、医薬品が直接接触したところを中心に、全身に症状が広がることが多い。
10. 薬疹を起こしたものと同種の医薬品を再度使用すると、重篤なアレルギー症状を生じるおそれがある。
11. 光線過敏症では、医薬品が触れた部分に光が当たり、皮膚症状が全身に広がることもある。
12. 黄疸は、ビリルビン(黄色色素)が胆汁中へ排出されず血液中に滞留することにより生じる、皮膚や白眼が黄色くなる病態である。
13. 間質性肺炎は肺の中で肺胞と毛細血管を取り囲んで支持している組織(間質)が炎症を起こしたものである。
14. 薬疹は医薬品の使用後2週間以内で起きることが多いが、長期使用後に現れることもある。
15. 中毒性表皮壊死融解症は、発生は非常にまれであり、いったん発症すると多臓器障害の合併症等により致命的な転帰をたどることはない。
16. 医薬品の副作用によって生じる精神神経症状は、通常の用法・用量でも発生することがある。
17. 無菌性髄膜炎の発症は、早期に原因医薬品の使用を中止すれば、速やかに回復し、予後は比較的良好であることがほとんどである。

【解答】

1. ○
2. × 皮膚粘膜眼症候群はスティーブンス・ジョンソン症候群とも呼ばれ、発症機序の詳細や原因となる医薬品は明らかにされていない。ライエル症候群は中毒性表皮壊死融解症のこと。
3. × このほか、有効成分に対する抗原抗体反応が原因で起きるアレルギー性のものもある。
4. × 偽アルドステロン症では、体内にナトリウムと水分が貯留し、カリウムの排泄が促進されるものである。
5. ○
6. ○
7. ○
8. ○
9. × 接触皮膚炎は医薬品が触れた皮膚の部分にのみ生じ、正常な皮膚との境界がはっきりしている。
10. ○
11. ○
12. ○
13. ○
14. ○
15. × いったん発症すると多臓器障害の合併症等により致命的な転帰をたどることがある。
16. ○
17. ○